

Iさん

飛騨市教育委員会 教育委員 向川原眞郷

教職を退いて教育委員という立場で三年目を迎えます。先日『教師をやってきてよかったなあ』と思う出会いがありました。

街角で出会った女性が私に声をかけてきました。『先生！久しぶりー！私、わかりますか？ Iです。』『？？？。アッ！ Iさんやよな。うわー懐かしい。40年ぶりじゃない！』と声を上げて喜びました。初めて学級担任した女子生徒で、中学一年生だった彼女の面影は、くっきりと思い浮かんできました。

彼女のことがリアルに思い出せたのは、訳があります。私は体育教員でしたが、当時、免外指導で数学も教えました。彼女が代表で問題を解いたとき、勘違いで間違っていました。理解力のある生徒だったので、勘違いは明らかでした。ところが私が心ない対応をしてしまい、彼女に涙を流させてしまったのです。それを見ていた周りの生徒も、彼女の様子に気づき、「Iさんがかわいそう」と私を非難しました。しばらくギクシャクした関係が続いたことを憶えています。そんな記憶が心にとどまっていたのですが、立ち話の最後は『先生！今度ごはん食べに行こうよ』と、予想外のことば。引っかけが、スルッととれたような気になりました。

学校では、40年前と比べたら教師と生徒の関わり方は、フラットな関係が大切になっています。それだけに難しさや、多くの時間を要する状況にもなっています。でも、教師として精一杯勤めた時間は、生徒が大人になって、成果として示してくれます。いい職に就いたと思いました。

教員のなり手不足に、国も危機感を持ち、勤務時間や待遇の改善は、少しずつかもしれませんが実現するでしょう。でも、教師という仕事の喜びや社会への貢献度など、人の生き方に関わるやりがいのある職業であることに魅力を感じ、教師を目指してくれる若者が増えることを期待しています。

みどりの里

東白川村教育委員会

教育委員 安江 里香

みどりの里（東白川村民の歌）

作詞 大坪 久美

作曲 藤掛 廣幸

- 一. 山の緑に つつまれて
みつばつつじが 目にしみる
瀬音やさしい ふる里に
遠いあの日の 子守唄
若鮎おどる ああ 東白川
- 二. 若い力が 土の香に
もえて希望の 糧となる
汗のしみこむ ふる里に
今日のしあわせ ありがとう
茶の花かおる ああ 東白川
- 三. 語りつがれた 碑に
遠い歴史の かげしのぶ
みんなで築く ふる里の
あしたに残そう 足のあと
ハナノキのびる ああ 東白川

これは昭和 58 年に制定された「みどりの里」東白川村民の歌です。この歌から読み取れるように、春や秋には山々に村の花みつばつつじ、村の木ハナノキが里山を美しく彩り、村の特産品の白川茶が私達の心を和ませてくれ、夏には清流白川に鮎を求める釣り人で賑わう自然豊かな村です。三番の「語り継がれた碑（いしぶみ）」の歴史は、昔、飢饉、疫病等に対する祈願と犠牲者の供養のために建てられた高さ 2.5m の南無阿弥陀仏碑は、明治 3 年「廃仏毀釈」により苗木藩の藩命により打ち砕かれることになり、製作者が呼び出されます。製作者は将来を考え粉々にせず綺麗に四つに割り、池や畑の脇石や踏石として潜ませました。時は過ぎ昭和 10 年、地元の人たちの手で四散した石片を集めて再建。しかし、その後もお寺が再建されることはなく、日本で唯一自治体の中に「お寺」がないことで

知られています。

この山間（やまあい）の平地の少ない土地に先人たちが、知恵を出し合い、汗を流し田畑を切り開いてこの村を作ってくれたことへの感謝も込められた詞となっています。

ふる里を離れた方たちが思い出して歌ってみると、田舎の風景がよみがえってきます。歌詞全てに、豊かな自然、人々の営みが表現されています。

この歌詞は当時、公募された 24 点のなかから選ばれたものですが、主婦であった私の母が作った詞です。当時小学生だった私は、なんだか恥ずかしくて歌うことをためらいました。母は隣町からこの地に嫁ぎ、村を愛したからこそ、この歌を創り上げられたんだと思います。

この歌を機会があるごとに村民の皆さんで歌い、後世に伝えていくのが私の役割であり、亡き母への唯一の親孝行になるかと思っています。